

# 気界漫想

佐佐倉航三

## ある雪の朝

たしか昭和23年の早春のことでした。月日は忘れましたが冬の寒さも去つてそろそろ櫻の花が咲き初める頃のことです。当時私は東京杉並の高円寺にある気象研究所内の一室に仮寓し自炊生活をしておりましたが、ある朝目覚めて程なく床の中で汽車の汽笛を聞きました。その音から直覚的に雪の朝であることを感じ、もう櫻も咲き初める頃なのにと独り訝りながら黒カーテンを開けたところ、私の判断の通り雪は既に止んでいましたが一面の銀世界です。雪の日（特に朝）の汽笛が平常と異つて聞える理由を考えてみますと次のような事項が挙げられます。

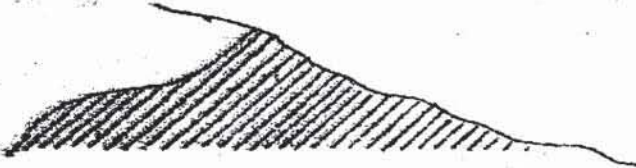
1. 朝の内はまだ除雪していないから交通機関の往来が少く、仮にあつても雪のために騒音が立たず従つて市中の雑音によつて汽笛が打ち消されるようなことが少くてふだんより遙かに純粋な音が聞えること。
2. まだ晴れよらない内であると雲が低いから雲面が音波を反射して汽笛が大きく聞える。又積雪面の温度は0°以下であるから下層大気の逆転も場合によつては考えられる。逆転のために音波は屈折するから上空へ逃げにくいこと。

さて本台へ出勤しようとして室の出口の階段を下りるとそこの雪面に眞赤なみみずが一匹見えた。雪の白さとみみずの赤さとの対照がひどく印象的であつたが更に研究所の正門を出て50mばかり行つところで全く同じような光景を見た。自分としては何だか珍しいことのような気がしながらも特に考えもしなかつたが、神田駅で下車して本台まで行く途中の街路上で三度全く同じ光景に接したのである。こんなことは読者にとつては不思議でもなんでもないことかも知れませんが私はその理由を一応考えてみたいと思ひながらつい今日までそのまゝにして置いてあります。どうか御教示願います。

## 蓮華岳の旗雲

戦中戦後の数年間私の家族が信州大町を疎開していたのでその当時私は東京大町間を時々往復し、大町駅頭で後立山連峯の中でも針の木峠に最も近い蓮華岳(3000m)の旗雲を観察する機会が兩三回あつた。日は記憶してないので(1回だけは1945年5月10日10時30分)判らないが何れも山頂から極く細くすうつと南側に延び、延びては消え、消えて

は延びると云う具合のもので、延びている時間は僅か数十秒程度ではなかつたかと記憶する。



山頂附近の積雪が烈風に吹き流されるもの、即ちドイツ語のPfeifenではないかとも考えたが、どうも雪があのように奇麗に針状にのびることやすうつとのびながら消えてしまうことは考えにくいのではないか。やはり風上側から吹き上げてきた気流によつて発生する一種の旗雲(山旗雲)と見るべきであらう。旗雲としても不思議なことはそれが正しく山頂から細く出ていることである。Pfeifenと見ることはこの点から考えても非常に困難である。旗雲とするならばそれが山頂の一点から出るためには風上側の斜面下方に広い谷があつて正しく頂上を向つてせばまつているような地形にでもなつているのであろうか風上側の烈風が山休に当り谷間に沿うて強制上昇を起し、それが上昇しながら山頂を向つて収斂するならばこの種の雲も出来るかと思われる。

## 幻日

気象光学の現象に幻日(月)がある。さして珍らしいものではないらしいが私は今日まで僅か二回しか見ていない。一回は千葉県の柏気象観測所、もう一回は信州の大町(1945年1月9日)であつた。何れも朝の向て日暈に向つて右側のだけの幻日であつた。東京日本橋に生れて小学生頃から気象に親しみ18入までそこで育ち、その後も東京で暮した年数は多いのであるが東京ではいつぞ一回も幻日を見なかつた。大都會では何かの理由で観測しにくいのではないかと考えている。